

松波むかし語り

ここに生き続けて

その26

今回のお客様

榎本畳店の

榎本 英夫さん 67歳 2丁目

“あの親父に任せとけば大丈夫だ、そう言われるのが職人じゃないでしょうか！”

一家の中が見えてしまう畳屋さんの仕事は、信用第一。それだから、町の中の仕事なんですね。



「いま震災で家が傾いた、家の中でビー玉が転がるなんて話をしていますが、部屋というのは100%、マッチ箱をよじったような形をしています。畳は部屋に合わせてつくるから、一つとして同じものがない。それで、畳産が効かないために私ら職人が生き残っているんです」と榎本さん。「住宅が洋風化して、昔は畳の部屋と洋間が2対1だったものが、今は逆転、あるいはまったく畳の間のない家もあって、私たちの仕事は確かに減っています」。しかし「今度の震災でも、壁とふすま・障子に畳の在来工法の強さが証明されましたが、湿気が多い日本の風土に合ってるんです。『結露』なんていう言葉は昔はなかったですから」。

そこで、畳の話です。「畳表に使うイグサは、根は水の中で白い、穂の先は赤く変色する。その真ん中の青く、きれいな部分を使うんですが、そこが長いものを密度濃く使えば使うほど値は高くなります」。いまはほとんど中国製で、中国製は国産に比べてやや硬いため、傷がつきやすいとか。「国産は草にねばりがあるから長持ちします。重さも重いんです」。榎本さんのところでは、一般住宅の場合は国産を使っているとのこと。

ところで、最近、畳が長持ちするのは「縁（へり）」のおかげとか。「へりは昔は4～5年で変色してしまっただから、それで畳表を裏返ししたり取り替えたんですが、それが化学繊維になって変色しにくくなったんです」。また、畳には箒（ほうき）が似合うのだとか。「よく畳の目に沿って掃けなんて言いますが、掃除機は目に沿って振り回すのは難しい。だから、箒のほうが畳は長持ちすると思います」。なるほど！

「職人は言葉は乱暴だけど、『あの親父に任せとけば安心だ』と言われるですね」。「畳替えをする時、タンスの引き出しを緩めて手をかけたり、畳屋には家の中のことが見られてしまう。だから安売りのチラシが入っても、知らない職人は家に入れたくない。だから畳屋は信用第一なんです」。高価な畳を使うお茶室の仕事も任される職人・榎本さんの一言です。



市内吾妻町でやはり畳職人をしていたお父さんが、いまの場所に畳屋を開いたのは、榎本少年が11歳、5年生の時。「職人はぜいたくな暮らしはできませんが、それでも親父は70まで仕事をしてました」。仕事の半分は町内とか。「もうすぐ親父が仕事をやめたトシになるけど、まだしばらくは続けられそうです」。「松波ですか？ 住み良い町ですから、少しずつ変わったらいいじゃないですか」。



清潔な仕事場は朝早い